河街道」とも呼ばれた道は、会津から岩瀬郡攻略の機をうかがっていた蘆名氏が勢至堂峠を切り開いたことに始まるようです。その後、この地方の覇者となった伊達政宗が、天正一八年（一五九〇）に豊臣秀吉の命を受け、本格的に開削・整備するに至って、遠距離交通路としてこの街道が確立したと考えられます。

江戸時代の初期には会津領と白河領に分かれたり幕領となったりしていたこの道筋も、元禄一三年（一七〇〇）の長沼藩成立とともに長沼宿に陣屋が置かれると、岩瀬郡西部の交通の要衝としていっそうのにぎわいを呈します。特に、陣屋（現長沼町役場の位置）や本陣のほか、問屋や主な旅籠などが集中していた内町と金町は、宿駅の中枢機能を果たしていた一帯でした。享保一五年（一七三〇）の資料によると、郡内では須賀川宿に次いで人口が集中していたことがわかり、その繁栄ぶりを知ることができます。

◎明日へ伝えたい、山間の小さな城下町

そしていま、風雲の歴史を見つめてきた長沼城址に、芥川賞作家・中山義秀の文学碑があります。「山間の小さな城下町に／初秋の風のおとづれを／聞くやうになつた」――長沼を舞台とした小説『碑（いしぶみ）』の一節が、そこに刻まれています。

義秀にとって、長沼は遠祖の地。祖父の代に大信村に移りましたが、それ以前は代々、ここに暮らし、町の永泉寺には、今も祖先の眠る墓があります。昭和三十七年、義秀は、町の招きで長沼を訪れ、文化講演会の演壇に立ちました。期せずして巻き起こった割れんばかりの拍手、そして一瞬、温かい親近感が生まれ、せき一つない会場に感激した義秀は、「私の祖先は代々、長沼の陣屋侍として務めさせていただいたが、私は郷里を忘れたことがない。けれども何もできなかった。それにもかかわらず、今日こんなに歓迎してもらい、心から感謝でいっぱいです」と語りかけました。

義秀が綴った「初秋の風のおとづれ」が聞こえるような、町の静かな佇まいは、いまも変わりません。その「山間の小さな城下町」のイメージを次代に伝えようと、町では歴史民俗資料館を、平成七年にオープンしました。歴史は、町の財産。古人がたどった〝ながぬま物語〟を、未来へとつないでいきたい――。それが私たちの変わらぬ願いです。

文学碑の前に立つ中山義秀

◆長沼町年表◆

西暦	年号	事　項
	景行朝	日本武尊東征のおり、この地に桙を立て桙衝と名づける。
1016	長和 5	頼家安倍貞任を討ち桙衝神社に奉賛。
1483	文明 16	長沼をめぐり蘆名盛高と二階堂盛義が戦う。
1541	天文 10	蘆名盛舜、長沼城を再興。
1566	永禄 9	長沼は蘆名領となり新国貞通の守城となる。
1590	天正 18	長沼城に蒲生四郎兵衛郷安、後に蒲生主計（上野田）1万石をおく。
1598	慶長 3	長沼に信州長沼城より島津恭忠が入る。
1643	寛永 20	長沼地方は白河藩主、松平（榊原）忠次領となる。
1649	慶安 2	長沼中心の三十一ケ村が幕領となる。
		長沼代官として設楽源右衛門をおく。
1698	元禄 11	横田領が成立。
1700	元禄 13	長沼藩成立。
1702	元禄 15	長沼藩に百姓一揆おこる。
1719	享保 4	凶作となる。
1731	〃 16	〃
1783	天明 3	凶作、長沼領内の打撃深刻化する。
1836	天保 7	凶作、水戸藩より千五百俵の稗を拝借する。
1865	慶応 1	矢部富右衛門、長沼焼を再興。
1869	明治 2	松平頼孝。長沼藩知藩事となる。
1889	明治 22	旧長沼、江花、勢至堂、志茂、小中村の五村を合併して長沼村となる。
		旧桙衝、矢田野、木之崎、横田、堀込の五村を合併して桙衝村となる。
1901	明治 34	長沼村町制を施行。
1934	昭和 9	大凶作となる。
1955	昭和 30	旧長沼町と旧桙衝村が合併、長沼町となる。